北村朋幹さん応援レポート

オーケストラ・アンサンブル金沢
第378回定期公演マイスター・シリーズ
2016年7月16日（土）
石川県立音楽堂コンサートホール

「ショパン」テーマのシリーズ最終回

オーケストラ・アンサンブル金沢（OEK）。石川県金沢市に本拠を置くオーケストラ。石川県と金沢市を中心に設立された財団法人石川県音楽文化振興事業団を運営母体とする。1988年に設立され、多くの外国人を含む約40名からなる日本最初のプロの室内オーケストラである。諸外国からメンバーを公募するとともに、現代音楽への積極的な取り組みや、国内・海外での精力的な演奏活動など、その演奏は各方面から高く評価されている。

会場の石川県立音楽堂は、OEKの本拠地。金沢駅の目の前という交通至便な立地を有す。シューボックス型のホール内部は優雅な雰囲気。荘厳なパイプオルガンにも目を惹かれる。客席の三層構造も印象的。客席規模は1560席。これは、シューボックススタイルの原点となったライプツィヒのゲヴァントハウスと同じ席数なのだそうだ。バランスのよい音響、迫力ある臨場感のもと、クラシックの様々なレパートリーが演奏されてきている。

本日の公演はOEK音楽監督・井上道義氏の指揮による「マイスターシリーズ」。OEK2015-2016シーズン（シーズンは9月スタート）のテーマ「ショパンと友人たち」全5回の最終回。5回の演奏会で、ショパンのオーケストラ付きピアノ曲全6曲とショパンと同世代の作曲家の作品を取り上げてきたシリーズである。北村さんはソリストとしてショパンのピアノ協奏曲2曲を演奏する。

公演前にはロビーにて、OEKメンバーによる室内楽のプレコンサート。メンデルスゾーンの弦楽四重奏曲第1番第4楽章。優雅な気分に浸らせてくれる。この夏には南フランスの音楽祭での海外公演が予定されているそうだ。

ショパンのコンツェルト2曲、「情熱の繊細さと審美眼の洗練さ」

写真ご提供：オーケストラ・
アンサンブル金沢

本日北村さんが演奏するのは、ショパンの「ピアノ協奏曲 第2番（作品21）」と「ポーランドの歌による幻想曲（作品13）」の2曲。もともとお話があった「第2番」に加え、5月末に急遽連絡を受け、もう1曲協奏曲を演奏することが決まったのだそう。演奏されること自体非常に珍しい作品とのことで、「・・・急いで楽譜を手に入れ、慎重に隅々まで楽譜を読んでいくうちに、作品への愛着もどんどんわいてきて、・・・ぜひ挑戦させてくださいという返事をしました」「・・・お引き受けすることを決断して以降、6月はこの作品に没頭していました」との事前のコメント。

人気の2番（作品21）と新挑戦の作品13。この組み合わせは、1830年3月ショパン本人により初演された組み合わせ。本日は北村さんが奏でてくれる。

演奏会の始まりは朗読から。照明が消された暗闇のなか作曲時の時代背景が語られる。当時ショパン18歳。敵に攻め込まれ続けてきたポーランドの歴史、音楽によって祖国への愛情を表現し、音楽から祖国に誇りと栄光を！という若きショパンの思いが伝えられる。

ドラマチックな盛り上がりののち、マエストロと北村さんが登場。最初の曲、「ポーランドの歌による幻想曲」が始まる。通常と異なるピアノの配置。 ピアノをオケの一員と位置付けたかのよう。優美で美しい音色が奏でられる。
「・・・ほとんど誰も演奏しないような曲で、曲中に、確かにその理由がよく分かるような部分、物理的に不可能に近い、作品自体があまり上手くいっていない箇所があるのも事実です。今回、リハから本番にいたる過程で、マエストロとオーケストラの皆さんと本当に沢山のことを試しながら演奏を作っていきました。ピアノの場所を変えたり、こっそり音を変えたところも実は一部あるのですが、それらには全て理由があり、つまりショパンの時代とは楽器もホールも違うわけで、彼の生きていた環境で生み出された作品とその精神を、金沢の大ホールでモダン楽器で弾くためのアップデートと言いますか…オーケストラの方々と、ここまでフレキシブルに色々な事を試せるというのは、とても貴重な経験でした」と北村さん。マエストロと両手でがっちり握手。満場の拍手を浴び、小休憩。

2曲目。雰囲気も新たにキラールの 「オラヴァ」。 15人の弦楽編成。コンマスの弾き振り。民族的な香りもする小粋な現代音楽。この選曲、OEKならでは。

次の曲、北村さんソリストのショパンのピアノコンツェルト第2番が始まる。
『情熱の繊細さと審美眼の洗練さ』・・・プログラムノートの記述が、そのまま北村さんに重なる。
ひたすら美しい音色にうっとり。けして出過ぎず引き過ぎず。なんというか、奥行きある演奏。骨のある主張を感じさせつつ、柔らかく染み渡る耽美な演奏に聴き惚れる。オケとの一体感、溶け合うかのよう。マエストロの指揮は、ソリスト、オケ、そして聴衆をも鼓舞する。

曲が終わり、マエストロとハグ。コンマスと熱い握手。大ホールを埋める客席からの満場の拍手とブラヴォーの声。
何度も何度も続くカーテンコール。マエストロは、コンツェルト2曲という大役を果たした北村さんの手を高く上げて応えてくださる。ラストのコールでは井上マエストロ、万歳で祝福。満員の聴衆をわかしてくれた。

休憩ののちメンデルスゾーン。マエストロはマイクを持って登場。
「・・・北村君というすばらしいピアニストを迎え・・・今25歳ですが、弾いてもらってハッピーでした」とうれしいお言葉。
交響曲 「スコットランド」を奏で、演奏会は終演。素晴らしい演奏に満員の客席から惜しみない拍手が贈られていた。

ショパン母国への想いと理解を込めて

写真ご提供：
オーケストラ・
アンサンブル金沢

終演後はサイン会。マエストロと北村さん2人によるサイン会ということで、長い長い列ができた。

北村さんに、話を聞いた；
「・・・（この演奏会の）お話があったのは1年半前。マエストロは厳しい方だよと言われていたのですが、本当に音楽への愛情が溢れている方で、そういう方と音楽を共有させていただいた時間は、ただただ至福の時でした」。井上マエストロは年末の財団コンサートにも、ここ数年足を運んでくださっている。

曲のイメージ；
「・・・（ショパンの母国である）ポーランドは特殊な歴史、敵に攻め込まれるという繰り返された歴史があり、僕もよく練習に訪れるのですが、街にも独特の雰囲気が流れています。（ショパンの曲には）だからこその華やかさ、その裏に怒りがあるのではと想像してしまいます。自分は東欧の作曲家が好きなのですが、そうしたところも関連しているように感じています」

「・・・ショパンはこの数年ほとんど弾いていなかったのですが、2番（作品21）は最も好きなコンツェルトのうちの一つです・・・本当に特別な曲です。美しくない音はひとつもありません。出だしのメロディーから3楽章まで、弾けば弾くほど、美しい瞬間が後ろに流れていってしまうという寂しさもあります。それはすごく切ないことだと思うし、人生ってそういうものかなと。言葉はいらない曲です」

「・・・1曲目の幻想曲は、1か月前まで僕も知らなかったくらい、あまり演奏されない曲です。自発的には弾く機会はなかったと思われ、今回出会えてよかったと感じています。（ポーランドの）皆が知っている曲を出していくという構成ですので（ポーランドの歴史などもふまえ）自分がポーランド人であればすごくうれしい曲だろうなとも感じました」

≪演奏会概要≫
◆出演
指揮：井上道義
ピアノ：北村朋幹＊
管弦楽：オーケストラ・アンサンブル金沢
ナレーション：門田宇
コンサートマスター：アビゲイル・ヤング

◆プログラム
ショパン：ポーランドの歌による幻想曲 作品13＊
キラール：オラヴァ（1988）
ショパン：ピアノ協奏曲 第2番 ヘ短調 作品21＊
メンデルスゾーン：交響曲 第3番 イ短調 作品56
「スコットランド」

さまざまな挑戦により「枠組みを超えていきたい」

終演後、
楽屋で
井上マエストロと

ー本日の演奏は；
「・・・悔しい部分もたくさんありますが、リハや来日前の演奏機会も含め、今日が一番よかったと思います」。 演奏会前には、ベルリンやポーランドで、師匠方が（ピアノ伴奏で）何回か弾く機会をくださったとのこと。

「・・・マエストロとオーケストラのみなさんのおかげです。井上マエストロの瞬間に示される表情、オーラ。毎日それが変化されて、本番は本当に即興的に音楽がどんどん彼から湧き出てくるような感じなのですが、それをオケもどんどん汲み取って、実際に素晴らしい音に変換されていく。こちらが即興的に思いついて弾いたことに対しても、すごくニコニコされながら、『じゃぁこっちも（オケも）』みたいな感じで。本番も、音楽の上で会話をしているような錯覚もあり、それだけで嬉しくなってしまって。傍観してしまうくらいの迫力でした。本当の音楽家ってこういう人達なんだ・・・と」

「・・・自分の中の今の課題というか思いとして、何か『枠組みを超えたい』というのがあります。簡単にできることではないのですが」

「・・・先週まで滞在していたポーランドでも、いろんなことを考えて、いろんなレッスンを受けて。また、今日は新たなチャレンジの機会をいただいて・・・。こうしたことを続けていったら新しい世界が見えるのかなという思いもあります」。

「・・・本当に今日は素晴らしい時間でした。自分の横で生のオケが鳴っている、自分が音を出した瞬間、オーケストラが一緒になって音を作っていってくれるというのは、すごくしあわせなことです」

「・・・（本日は初めての曲もあり）今後、自分でいろんなことに挑戦していくうえで、ひとつの階段が見えたような感覚がありました。ショパンのこの曲も弾き続けていきたいと思います」。

「・・・本当にしあわせでした。感謝の気持ちでいっぱいです。また一緒に弾かせていただければ」。

終演後の井上マエストロのSNSには
『・・・北村朋幹君、成長して大成功！』」のコメント。

北村さん、
素敵な演奏でした。
また聴かせてください！

【コンサート・フライヤー(表)】

Orchestra Ensemble Kanazawa
第378回定期公演マイスター・シリーズ

オーケストラ・アンサンブル金沢

ショパンと友人たち

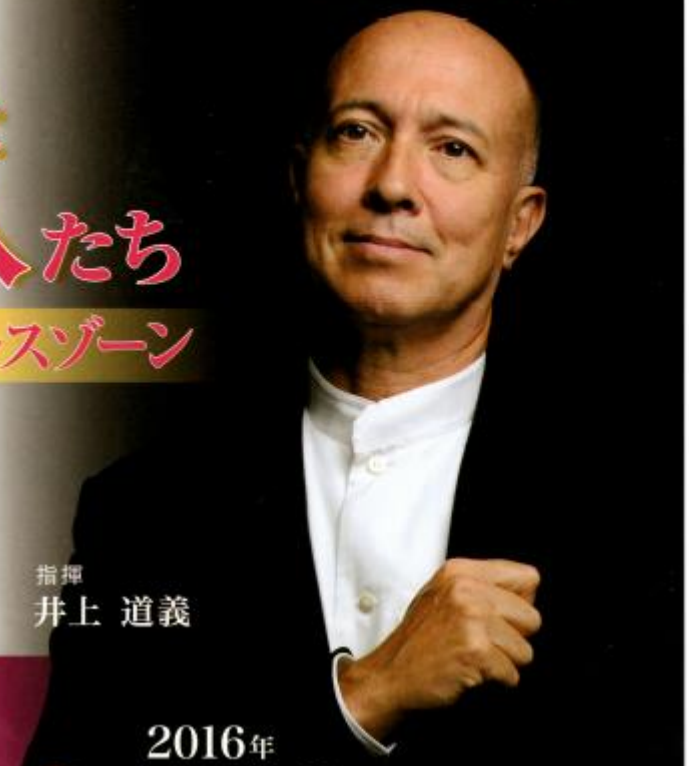
2015−2016 シーズン
ショパン オーケストラ付
ピアノ曲全6曲連続演奏

第5回 ショパンとメンデルスゾーン

Orchestra Ensemble Kanazawa
The 378th Subscription Concert Meister Serie
Saturday 16 July 2016, 2:00pm
At ISHIKAWA ONGAKUDO Concert Hall

Michiyoshi Inoue, Conductor
Tomoki Kitamura, Piano*

Chopin and Mendelssohn
W.Kilar : Orawa (1988)
F.Chopin : Piano Concerto No.2 in F minor, op.21*
F.Mendelssohn : Symphony No.3 in A minor, op.56 "Scottish"



指揮
井上 道義

キラール
オラヴァ(1988)

ショパン
ピアノ協奏曲 第2番 ヘ短調 op.21*

メンデルスゾーン
交響曲 第3番 イ短調「スコットランド」op.56

ピアノ*
北村 朋幹

2016年
7月16日(土)
14:00開演(13:15開場)
石川県立音楽堂コンサートホール
JR金沢駅兼六園口
〒920-0856 金沢市昭和町 20-1
TEL.076-232-8111

コンサート前のお楽しみ
13:15頃 OEKメンバーによるプレコンサート
(音楽堂2Fカフェ・コンチェルト)

全席指定(税込)

SS席	6,000円	S席	5,000円	A席	4,000円
B席	3,000円	スターライト(3階バルコニー)	1,000円		

25才以下の方は当日券を50%オフでご購入いただけます!(年齢を証明できるものをご提示下さい)

4月16日(土)10:00 一般発売開始

石川県立音楽堂チケットボックス TEL.076-232-8632
WEBからの予約もできます。 http://www.oek.jp/
香林坊大和・金沢百番街・ローソン(Lコード 59711)
チケットぴあ(Pコード 265-436)
セブンイレブン・ブランネット 076-268-7116

文化庁
文化庁文化芸術振興費補助金
(トップレベルの舞台芸術創造事業)

15th

都合により内容に変更が生じる場合がございます。予めご了承ください。

未就学児の入場はご遠慮ください。託児ルーム(有料)あります。
託児申込みは7/13(水)17:00までとなります。TEL.076-232-8111

※石川県立音楽堂地下駐車場の台数に限りがございます。最寄りの駐車場または公共交通機関をご利用ください。

主催/公益財団法人石川県音楽文化振興事業団

【コンサート・プログラム（表紙）】

【コンサート・プログラム　P.1～3】

第378回定期公演　マイスター・シリーズ
The 378th Subscription Concert / Meister-Serie

2016年7月16日（土）　14:00
石川県立音楽堂コンサートホール
Saturday, 16 July 2016 at 14:00
Ishikawa Ongakudo Concert Hall

指　揮　井上　道義
Conductor　Michiyoshi Inoue

ピアノ　北村　朋幹
Piano　Tomoki Kitamura

ナレーション　門田　宇
Narration　Takashi Kadota

コンサートマスター　アビゲイル・ヤング
Concertmaster　Abigail Young

ショパン　Frédéric Chopin
ポーランドの歌による幻想曲　作品13
Fantasy on Polish Airs, Op.13
※追加になりました。
Added to original program.

休　憩
Intermission

キラール　Wojciech Kilar
オラヴァ（1988）
Oravaa for String Orchestra (1988)

ショパン　Frédéric Chopin
ピアノ協奏曲　第2番　ヘ短調　作品21
Piano Concerto No.2 in F minor, Op.21

休　憩
Intermission

メンデルスゾーン　Felix Mendelssohn
交響曲　第3番　イ短調　作品56「スコットランド」
Symphony No.3 in A minor, Op.56 "Scottish"

コンサート時に託児を用意しております。ご希望の方はお申し出下さい。

演奏をお楽しみいただくために
●写真撮影・録音・録音はご遠慮ください。●通路の狭い客席では後から来たお客様に通り道をあける
ご配慮をお願いします。●石川県立音楽堂コンサートホールでは、携帯電話の電波を遮断する装置が
ありますが、携帯電話の電源、腕時のアラームはお切りください。●ビニール袋や手荷物のアクセ
サリーなどの音にご注意下さい。●咳が出そうな場合はハンカチで押えるなどのご配慮をお願いします。
それでは演奏の最後の余韻まで、音楽をお楽しみ下さい。

1

プロフィール
Profile

指　揮　井上　道義（OEK音楽監督）
Conductor　Michiyoshi Inoue (OEK Music Director)

1946年東京生まれ。桐朋学園大学卒業。71年グイド・カンテルリ指揮考コンクールに優勝。ニュージーランド国立交響楽団首席客演指揮者、新日本フィルハーモニー交響楽団音楽監督、京都市交響楽団音楽監督を歴任。これまでに、シカゴ響、ベルリン放送響、ベネズエラ・シモン・ボリバルなどに登場している。99年から2000年にかけて、マーラーの交響曲全曲演奏会を10回シリーズで、新日本フィルハーモニー交響楽団とすみだトリフォニーホールにて行い、「日本におけるマーラー演奏の最高水準」と高く評価された。07年目露5つのオーケストラとともに「日露友好ショスタコーヴィチ交響曲全曲演奏プロジェクト」を、13年にはサンクトペテルブルク交響楽団と国内ツアーを実施し、音楽・企画の両面で大きな成功を収めた。

07年よりオーケストラ・アンサンブル金沢音楽監督、ならびに石川県立音楽堂アーティスティック・アドバイザーを務め、ラ・フォル・ジュルネ金沢を含む多くの実験的企画を敢行し続けている。14年4月、大阪フィルハーモニー交響楽団首席指揮者に就任。就任披露演奏会直後、病に倒れるが同年10月に復帰を遂げる。15年には全国共同制作オペラ「フィガロの結婚」（野田秀樹演出）を指揮し、大成功を収めた。10年「平成22年京都市文化功労者」、社団法人企業メセナ協議会「芸もてなし賞」、16年渡邉奨雄基金特別賞を受賞。自宅にアヒルを飼っていた。

オフィシャルサイト　http://www.michiyoshi-inoue.com/

2

ピアノ　北村　朋幹
Piano　Tomoki Kitamura

1991年愛知県生まれ。

3歳よりピアノを始め、浜松国際ピアノコンクール、シドニー国際ピアノコンクール（オーストラリア）、リーズ国際ピアノコンクール（イギリス）などで入賞。2005年第3回東京音楽コンクールにおいて第1位ならびに審査員大賞（全部門共通）を受賞。

05年6月に茨城県水戸市芸術館多目的ホールにて初めてのリサイタルを開催、以後国内各地をはじめドイツ、フランス、スペイン、イギリス、ポーランドなどで定期的に演奏を行うほか、「東京の夏音楽祭」「ラ・フォル・ジュルネ・オ・ジャポン音楽祭」「武生国際音楽祭」などに招待される。国内外の主要オーケストラと度々共演し、室内楽にも積極的に取り組んでおり、また近年は古楽器での演奏会にも多数出演している。

11年にデビューCD「道かなる悲人に寄すーシューマン「幻想曲」からの展望ー」、14年に「夜の肖像」、そして16年4月に最新盤となる「黄昏にープラームス、リスト、ベルク作品集」がfonteeより発売され、レコード芸術誌をはじめ各雑誌において好評を得ている。

愛知県立明和高等学校音楽科を経て東京藝術大学に入学、11年よりベルリン芸術大学に在学し、現在ピアノ科及び古楽科に在籍し研鑽を積んでいる。ライナー・ベッカー、伊藤恵、エヴァ・ポブウォッカの各氏にピアノを、ミツィ・メイヤーソン氏にチェンバロ及びフォルテピアノを師事。

3

【コンサート・プログラム　P.4～6】

プログラム・ノート（7月16日）

音楽ジャーナリスト　飯尾　洋一

ショパンにとって、メンデルスゾーンはシューマンやリストと同じく、同世代の盟友といってよい。年齢はメンデルスゾーンが一歳年上である。1810年前後に集中的に誕生したロマン派の作曲家たちは互いに交友しながら、それぞれに独自のスタイルを切り拓いて音楽史に名を残した。

ショパンとメンデルスゾーンを横軸の関係とすれば、ショパンとキラールは同じポーランド生まれの作曲家という点で縦軸の関係にある。3年前に世を去ったキラールは映画音楽の作曲家としても知られるが、近年、演奏会で取り上げられる頻度が着実に上がっていると感じる。ポーランド音楽の歴史に新たな一ページを刻む存在といって過言ではないだろう。

ショパン
ポーランドの歌による幻想曲 作品13

フレデリック・ショパン（1810－1849）が1858年に完成したポプリ（メドレー）風の協奏的作品。後述するピアノ協奏曲第2番とともに1830年3月にコンサートで初演された。

曲はラルゴ・ノン・トロッポの序奏で開始される。穏やかな管弦楽に続いて、独奏ピアノがカンタービレ（歌うように）と指示された甘やかな旋律を奏でる。

続く第1部はアンダンティーノ。ポーランド民謡「月は沈みぬ」の主題に次々と装飾が加えられる。

第2部はアレグレット。当時のワルシャワにおける重鎮作曲家カロル・クルピンスキの主題が用いられる。

第3部はヴィヴァーチェ。ポーランドの民族舞踊による主題を用いて、独奏ピアノが華やかに躍動する。

キラール
オラヴァ（1988）

ヴォイチェフ・キラール（1932－2013）はポーランドのルヴフ（現ウクライナのリヴィフ）生まれの作曲家。1950年から55年にかけてカトヴィツェで学び、その後フランスに渡ってナディア・ブーランジェに師事した。初期にはフランス近代音楽やバルトークらの影響を受けた作品を残し、その後前衛的な手法と民族的な素材を融合させ、代表作である交響詩「クシェサニ」他の作品を残したほか、「平和へのミサ」など宗教作品でも知られる。

映画音楽の分野でも活躍し、ロマン・ポランスキー監督の「死と処女」「ナインスゲート」「戦場のピアニスト」といった作品や、フランシス・フォード・コッポラ監督の「ドラキュラ」などで音楽を担当している。

この「オラヴァ」は1586年に書かれた弦楽オーケ

ストラのための作品。同年、ヴォイチェフ・ミマニェフスキ指揮ポーランド室内管弦楽団（現在のシンフォニア・ヴァルソヴィアの前身）によって初演された。第1ヴァイオリン5、第2ヴァイオリン4、ヴィオラ3、チェロ2、コントラバス1という15のパートの弦楽器のために書かれ、より編成の大きな弦楽オーケストラで演奏することも可能となっている。

タイトルの「オラヴァ」とはポーランドとスロヴァキアにまたがるカルパチア山脈を流れるオラヴァ川を指すとともに、牧草地の意味も持つという。ハイランダー・バンド（スコットランド風のバグパイプ他による野外楽団）に触発されて書かれた作品で、作曲者によれば「数少ない満足できる自作」。民族音楽風の彩りが添えられた簡潔なリズム音型の反復によって、力強い推進力が生み出される。

ショパン
ピアノ協奏曲 第2番 ヘ短調 作品21

ピアノ協奏曲第2番ヘ短調も他のショパンの協奏的作品と同じく、故郷ワルシャワで過ごした若き日に書かれている。作曲は1829年から30年にかけて。当時ショパンは19歳の若者である。出版順に従って「第2番」の番号が与えられているが、作曲順では第1番よりもこちらが先に書かれている。

1829年7月、ショパンはウィーンを訪れ、ケルントナートーア劇場でコンサートを開いて大喝采を受

けた。ウィーンでの評判はワルシャワの新聞でも報じられ、故国でのショパンに対する期待を一段と高めた。ぜひワルシャワでもショパンの演奏を聴きたい。そんな人々の求めに応えて、1830年3月にショパンのコンサートが開催されることになった。この公演のために用意されたのがピアノ協奏曲第2番ヘ短調である。「演奏前の三日間がどれほど辛いものか、わからないだろう」（ショパンから親友ティトゥスへの手紙）という作曲者の心配に反し、公演は大成功を収め、一般聴衆からも批評家からもショパンへの熱烈な賛辞が寄せられた。

現地の外国特派員新聞は、「ピアニストとしては情感の繊細さと審美眼の洗練において（当代一流の）フンメルをも凌駕する。作曲家としても一流作曲家たちと対等の水準にある。やがてポーランドもヨーロッパ最大の演奏家と作曲家のひとりを有する名誉にあずかることだろう」と、鋭くもショパンの才能を見抜いている。

第1楽章　マエストーソ　優しい問いかけにきっぱりと応答するような管弦楽の第1主題で開始される。オーボエが第2主題を奏でる。入念な提示部の末にようやく独奏ピアノが登場し、華麗な名技性を発揮しながら次々と彩り豊かな表情を見せる。

第2楽章　ラルゲット　理想の女性コンスタンツヤ・グワトコフスカへの想いが込められている。夢想するかのような甘美なロマンス。

第3楽章　アレグロ・ヴィヴァーチェ　民族舞曲風の主題で開始され、優美で爽快な空想がくりひろげられる。弦楽器のコル・レーニョ（弓の木の部分で弦を叩く奏法）が登場するのも民族舞曲を思わせる。ひなびた調子のホルンのソロが、きらびやかな終結部を予告する。

メンデルスゾーン
交響曲 第3番 イ短調 作品56
「スコットランド」

1829年、20歳を迎えたフェリックス・メンデルスゾーン（1809－1847）は、両親の強い勧めにより、数年間にわたる外国旅行に出発する。まずはロンドンに向かい大規模なコンサートを開くと、演奏会シーズンの終了後にスコットランドへと向かった。エディンバラに到着したメンデルスゾーンはホリールード宮殿の廃墟を観光し、その晩、ベルリンの家族に手紙を書いた。「今日、深い責任のなかで、女王メアリーが人生を送り、愛を営んだ宮殿を訪れました。そこでスコットランド交響曲の始まりを思いついたのです」。メンデルスゾーンは曲の冒頭部をスケッチに残している。

しかしその後、作曲の筆は思うように進まない。作品はいったん棚上げされ、12年もの時を経た1841年夏になって、ようやく本格的に作曲が再開されることになる。1842年1月にスコアが完成され、同年3月に自身の指揮によってライプツィヒのゲヴァントハウスで初演された。同年5月にイギリスを訪れた際は、フィルハーモニー協会で交響曲「スコットランド」を演奏し、曲をヴィクトリア女王に献呈している。

上版順に従って交響曲第3番の番号が添えられているが、全5曲中この曲がメンデルスゾーンが最後に完成した交響曲となった。曲は4つの楽章からなるが、それぞれを休みなく演奏するように指示されている。

第1楽章　アンダンテ・コン・モート～アレグロ・ウン・ポーコ・アジタート　朽ちた宮殿から触発されたであろう、幻想的で物語風のアンダンテによる序奏で開始される。長い序奏に続いて、メランコリックなアレグロの主部へ入る。終結部の手前には、海の嵐を思わせる表現があらわれる。

第2楽章　ヴィヴァーチェ・ノン・トロッポ　民謡風の主題による軽快で楽しげなスケルツォ。

第3楽章　アダージョ　端正な序奏に続いて、弦楽器による伸びやかで抒情的な主題が奏でられる。続いて管楽器によって提示される付点リズムによる主題は葬送行進曲を思わせる。曲は両主題を交替させながら進み、相反する二つの気分をひとつの楽章に巧みに同居させる。

第4楽章　アレグロ・ヴィヴァチッシモ　作曲者によれば「戦いのアレグロ」。緊迫感にあふれた合戦シーンとでもいうべきか。勇猛果敢な戦いはやがて収まり、代わって高らかな凱歌がうたわれる。